

浄法寺高校と共に

同窓会顧問

田 口 一 男



本校は、全国的に下位に位置していた高校進学率を向上させる一環として岩手県が自治体に高校を誘致する時代に創立されました。昭和二十三年、福岡高校浄法寺分校の夜間定時制から始まり、昼間定時制へ、さらに全日制の高校へと移行され、旧高校を引き継ぎながらも昭和五十年に独立校として「浄法寺高校」が設立されました。長年にわたる先代の高等教育に対する限らない思いが、「浄法寺にも高校を」の誘致運動で実現できました。設立後、安代町と一体になり、三学級の総勢四百余人の在校生が学び、部活動でも県家庭クラブで最優秀賞を飾り東北大会出場を果たしたのを始め、相撲部では大相撲の栃乃花関を育て高

総体優勝、さらにスキーでは国体女子5km優勝など輝かしい業績を積み上げてきた高校でした。その後、大学進学優先と少子化の中で、地元高校よりも有名進学校志願者が急増し、一学級四十人の維持さえ困難な状況下となりました。

高校進学選択の懇談会の際、進学校を希望する保護者の方々は「子どもの教育を受ける権利を侵害する」と言い、関係地域の中学校の校長会では、校長一同申し合わせたように「各中学校の先生は、高校選択に関して誘導はしていない」との発言でしたが、当時の安代町八重樫教育長は、「担任の先生は少なからず進学校への誘導をしていますよ」と述べられ、場の雰囲気が一変したこともありました。このように中学校や保護者の中では、地元高校への就学に対して温度差もありました。

親の見栄や、子に過度の期待を持つ保護者もあり、当時の浄法寺高校の校長先生からは、「なぜ地元高校を大切にしないのか。他の学校では見られない。」などと苦言を呈されることもありました。しかし、学校存続に向けて地域一丸となり、一人でも地元高校に進学してほしいと、在校生始め教育振興会や町議会、行政も巻き込んだ各種募集活動や、近隣の中学校訪問など、ピアーアルに努めました。また、他の市町村からの募集、ハワイの高校生との交流研修を兼ねた修学旅行、中学生と合同の

海外研修など、浄高の目玉を作り、町でも後押しをしてきました。さらに県の高校再編成による削減の対象にならないよう、町や各種団体と一緒に、高校存続運動を繰り広げてきました。しかし、市町合併を機に運動が弱まり、四十年の歴史を残して「小さくともキラリと光る」地元高校を閉じることになってしまいました。歴代の浄高に在任された先生方からは離任の際、「県北の小さな学校で、熊が出る寂しい学校とも言われてきましたが、時が経つに連れ、小規模高校の暖かさに打たれ、地域との交流など教育の原点にも触れることができた」と述べていただきました。「自彊不息」「自勝者強」の校是の伝統を地域に引き継ぎ、高校の跡地利用にも生かしていただきました。いものです。

永きに渡る学び舎を閉じることには残念ですが、これまで浄法寺高校や浄法寺校の卒業生を始め、同校に関わった教職員の皆様、PTAの関係者また地域の方々に支えていただいた思いは、これからも永遠に深く心に刻まれることと思います。最後に福高浄法寺分校の礎から浄高・浄校までの六十八年もの間、二千八百六十七名の卒業生を輩出した浄法寺高校よ、ありがとうございました。

浄法寺校での思い出

平成二十年度PTA会長

三 浦 嘉 永



浄法寺高校閉校に際して、関係者の皆様、
本当にご苦勞様でした。

私にとって浄法寺高校という名前がなくなっ
てしまう事はとても寂しく残念です。

浄法寺高校とは縁があつて、私の兄から始
まり私と妻そして息子二人と娘一人計六人が
卒業しました。

息子が浄法寺高校に入学することになり、
私もPTAとして母校に来ることができ、浄
法寺分校以来六十八年余りの歴史に関わる事
ができました。母校に対する思い出は沢山あ
ります。長男が入学し、男子が二、三人しかい
ないテニス部に入り県大会には行けるとは思
いもしませんでした。当時の顧問の先生が

バスを借りて自分で運転をして練習試合など
に連れて行ってもらいました。あの時は、と
ても感謝しました。そして、三年生のときに
は県大会にまで行けるようになり、とても楽
しい思い出になりました。

次男が入学したときは、先輩達も頑張つて
いましたから自分もここで友達と野球をや
りたいと言ひ、五人位まとまって入部しまし
た。それにつられるように後輩たちが、続々と入
部してきてくれました。三年の時は一回戦を
勝ち上がり二回戦では敗れましたが三年
間夜遅くまで野球に打ち込めたことは、いい
青春時代を過ごせたのではないかと思います。

娘のときも、テニス部で三年間頑張り県大
会にも何度か行くことができ、そのたび顧問
の先生には大変お世話になりました。

私も浄法寺高校に入り、当時の先生方に大
変お世話になりました。当時はいろいろ辛い
こともありましたが、ときには厳しくときに
は優しく接して下さった諸先生方に今は感
謝しております。統合は仕方がないと思つて
おりますが、いかにせん近くで母校を見てき
ましたので寂しく思っております。自分にとつ
て浄法寺高校は、友達を多く持て、先輩、後輩、
いろんな人との出合いの場所でもあり、何事
にも一生懸命出来た場所でありました。今、
走馬灯のように浮かんでくるのは、いい青春
時代を送れた事です。

浄法寺高校が多くのの人々の熱い期待と必要
によって誕生し、その歩みを立派に築き上げ
たように岩手県立福岡高校になつても多くの
課題を抱えつつその期待に応え発展し続けて
いきますことを信じ、今後とも応援してい
きたいと思ひます。

これからの生徒たちに、期待しております。



福岡高等学校浄法寺校の 閉校にあたって

浄法寺高等学校第十五代校長

(平成十九年度)

現富士大学教授

菊池 豊



「岩手県立浄法寺高等学校」最後の校長として離任してから早いもので八年の歳月が流れようとしています。ついにこのときが来たかと万感胸に迫るものがあります。前任の松岡校長先生から「浄法寺高校は入学者数の減少から『後期高等学校整備計画』の対象校となり、福岡高校との統合もしくは分校化のいずれかを選択するという状況にある」との引き継ぎを受けました。着任後、二戸市や地域・学校関係者の要望により分校化の方向で調整

が進み、最終的に県教育委員会、県議会で承認され決定しました。分校移行準備に当たり、第一に心掛けたことは「生徒、保護者に不安を抱かせない」ということでした。そのため、生徒会やPTA（役員会、地区PTA）、同窓会役員会、学校評議員会、教育振興会などを随時開催しご意見を伺いました。その結果、已むを得ない事項（校名・校章・校歌・校旗・制服など）を除き、校是や教育目標、教育課程及び生徒会活動や部活動など実質的な教育活動は継承すること、校歌は「讃歌」として、校色（スクールカラー）や応援歌も現行どおり継承することなど、これまで本校が三十三年間にわたり育んできた伝統や教育環境を出来る限り引き継ぐこと基本として検討しました。その結果を集約し県教育委員会や福岡高校と協議をすすめ、最終的に「浄法寺高校分校移行準備委員会」（県教委、二戸市・同教委、八幡平市・同教委、地域教育関係者、本学関係者等）において本校の要望通りに承認されました。その後、事務的手続きなど細部について、福岡高校と担当者間で協議・調整を図り、最終的に両校校長で確認し決定しました。

持ちが複雑に交差したものになりました。三月二十二日、カシオペアホールで、二戸市長・同教育長をはじめ各会の代表の方々並びに地域教育関係者、PTA、同窓会等の本学関係者（百五十名）、教職員、在校生の出席のもと「校旗降納式」が厳粛に挙行され、その後「浄法寺高校を讃える会」を開催し、三十三年間の歴史に幕を閉じました。「校旗降納式」は、分校に移行しても教育環境が大きく変化することなく継続できることと、地域の皆様の複雑な思いを推し量り、一つの区切りと新たな門出の意味を込めて「閉校式」ではなく「校旗降納式」としました。正式な「閉校式」は、この校舎で教育活動を終え「分校」が閉じる時に県教育委員会と共催で挙行することで了解を得た経緯があります。

最後に、私に課せられた浄法寺高校の閉校という役割は、できれば担いたくないものでした。浄法寺高校が隆盛を誇っていた時代の歴代校長先生をうらやましく思ったものです。しかし、救いは八年前にわたり、浄法寺高校から引き継いだ福岡高校浄法寺校が地域の思いをしつかりと受け止め高校教育を担ってくれたことです。改めて歴代の福岡高校校長先生、浄法寺校の教職員の皆様、そして何よりも支援していただきました関係者の皆様に感謝申し上げ、浄法寺校舎で学んだ全ての卒業生のご活躍を期待したいと思います。

福岡高校浄法寺校での 二年間

岩手県立福岡高校第二十二代校長

(平成二十〇二十一年度)

小 柴 喜 治



八戸自動車道を、北に向かって浄法寺イン
ターの手前から左手を見ると、むこうの丘の
上に四階建ての鉄筋コンクリートの建物が見
える。緑に囲まれた中に浮かびあがっている
校舎は、ひととき目立つ。そこで過ごした二
年間は短い期間ではあったが、凝縮された時
間であり今でも思い出される。

平成二十年、浄法寺高校が福岡高校の分校
となった年に赴任した。前任の盛岡市立高校
は普通科、商業科、英語科の三学科の学校で
あったが、赴任する福岡高校は全日制、定時
制、分校を擁し、職員会議や学校行事もそれ
ぞれにあるため、三校の校長となったようで、

緊張した。

年度初めの全日・定時・浄法寺校の職員全
員による会議では「生徒に語りかけ 共に
学び 共に汗をかこう」をスローガンに経営
方針を述べ、そのあとそれぞれの職員会議で
方針の説明をした。まだ赴任もしていない学
校の、特色を生かした経営方針立案のために
頭を悩ませたことを覚えている。浄法寺校は
「自彊して息まず 自ら勝つものは強し」の校
是のもと、基礎学力の向上・進路実現・地域
との連携に努めることとし、特にも学力差が
激しい中で個性に応じた授業展開と進路意識
の高揚・地域へのボランティア活動などを重
点的に取り組むこととした。

分校化したということで、生徒たちの動揺
もある中、先生方は小野寺副校長を先頭に、一
生懸命に学校づくりに取り組んでいた。一
人ひとりの能力に応じた学習指導や進路指導。
生活習慣確立のための生活指導。悩みを抱え
た生徒への相談。部活動指導。職員会議での
真剣な議論。その姿勢には本当に頭の下がる
思いであった。

当時は、浄法寺校の看板ともいえる相撲部
は部員も少なく、団体戦を組む為他のクラ
ブの応援を頼む状態の中、毎日道場で顧問の
胸を借りて稽古に励んでいた。私は時間のあ
るときには、浄法寺校の道場で過ごすことも
あったが、気迫のこもった稽古には圧倒され
たものだった。また、部員の少ない野球部は、
夏の大会で花巻農業高校を相手に十一対一の
五回コールド勝ち。花巻農業高校の大応援団

を前に浄法寺校の応援は少人数ながらも生徒
一丸となっていた。まさに「小さくともキラ
リと光る学校」を実感し、分校としての新た
なスタートを切った。

こうして振り返っていると、次から次と思
い出が湧き上がってくる。そして校長室に掲
げられてあった瀬戸内寂聴さんの句が浮かぶ。
「生かされて いまある幸や 初茜」 本当に
皆さんに支えられて務めることができた二年
間であった。

閉校に当たり、今まで浄法寺校を応援して
くださった清川副市長さんはじめ地域の皆さ
ん、とりわけ同窓会・PTAの皆様方には感
謝の念で一杯です。どうぞ浄法寺校の輝かし
い歴史を、地域の財産として語り継いでいっ
てください。



浄法寺校の思い出

岩手県立福岡高校第二十三代校長

(平成二十二～二十四年度)

佐々木 龍 孝



浄法寺校がその歴史に幕を閉じるということに、本校に在職した者として、当時の沢山の思い出が脳裏に浮かぶにつれ、時代の移り変わりによろとはいえ、やはり寂しさを禁じえません。浄法寺校は、生徒の努力、教職員の指導力、そして、保護者、同窓会、地域の皆さんの熱い思いに支えられ、今日まで教育活動が続けてくることができました。あらためて、関係の皆様から感謝いたします。

思い出の一端をご紹介します。私は、平成二十二年度から二十四年度までの三年間在職しました。この間は、全校生徒数が五十四名、三十七名、二十七名と激減期に入ってきた時期でした。特に、平成二十三年度の新入生は四名だけとなり、教職員はもろろん、入学式に出席

された来賓の方々にとっても、そのショックは隠せないものでした。

この年の三月には、あの東日本大震災が発生しました。浄法寺校は校舎内の壁面にヒビが入る被害はあったものの、日常の学校生活は大きな影響を受けず済みました。しかし、被災地の甚大な被害状況を伝え聞く中であって、生徒たちも、心の中に相当な重苦しさを抱えての学校生活だったと思います。

生徒たちは、しかし、この年もよく頑張ってくれました。特に、県高総体では、ソフトテニス部女子は、たった六人の部員で県ベスト十六に入る大健闘をみせ、本校伝統の相撲部もまた、部員数の少なさを厳しい練習で乗り越え、東北大会まで進出しました。生徒たちは、このような大変な年であるからこそ、自分たちのできることを一生懸命頑張ろうという姿勢を随所にみせてくれたのです。震災の翌年とはなりましたが、全校生徒で久慈、田野畑の被災地を訪問し、被災の現実を目の当たりにし、被災時の話を直接聞く機会を得ることができました。そして、その後、生徒たち自らが作成した漆塗りの器を被災地に寄贈できたことは、自分たちの被災地に寄り添う思いを伝えるよい経験となりました。

平成二十四年度は、十名の新入生を迎え、全校生徒二十七名でスタートを切りました。生徒数が極めて少ない本校にとって、全員で取り組める学校行事はとて大切であり、また、地域に支えられている本校にとって、地域との密接な関わりは非常に重要です。そこで、この年、生徒たちは二つのことに挑戦することにしました。

一つは「集団行動演技」です。毎年、体育祭の際には、保護者の皆さんが豚汁を作ってくれます。そこで、感謝の意を込め、保護者の皆さんの前で披露する集団行動演技にチャレンジすることにしました。号令一つで様々なフォーメーションを、全員が寸分の狂いもなく組み立てることは非常に難しいことです。しかし、誰一人諦めることなく、ついに体育祭当日、見事に披露することができ、保護者の皆さんに大変喜んでいただきました。

もう一つは、浄法寺祭りでの「浄法寺太鼓の演奏」でした。前年度までのさんざ踊りに替えての参加でした。初めて太鼓を叩く者もあり、祭り直前まで古タイヤを叩いての練習もしました。祭り当日、役場庁舎前の広場で、地域の大勢が見守る中、二十七名が息を合わせ、浄法寺太鼓を見事に叩き起りました。演奏が終わると同時に盛大な拍手が沸き起こり、「良かったねえ！」という温かい励ましの言葉を沢山いただくことができました。

この年、浄法寺校の生徒全員は、「一生懸命」取り組んだ結果、「ああ、やって良かった！」と心の底から思えることを、そして、一人ひとりが主役となれる、小さな小さな学校でしか経験できない感動を、行事をとおして二度も経験することができました。

私事ながら、退職の年の私の誕生日に、私にとっては全くのサプライズで、「全校生徒」に祝っていただいたことは、私の教職生活の最後の最高の思い出となっています。

浄法寺校の校舎から、笑顔の生徒たちのさわやかな挨拶が、今も聞こえてくるようです。